慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋元版禅籍と五山版
Sub Title	Reconsideration of Zen texts on the Song-Yuan editions and the Gozan editions
Author	椎名, 宏雄(Shiina, Koyu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2003
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.38 (2003.) ,p.33- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第五回(二〇〇三年六月十三日)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20030000-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第五回（二〇〇三年六月十三日）

宋元版禅籍と五山版

椎名宏雄

先程、文庫長先生のご挨拶の中で、「大家を招いて」という言葉がございましたが、私、全くそれとは不適応の人間であります。名もない者がこんな立派な所でお話しする機会を与えていただきましたことに、まず、厚く御礼申し上げます。

私は寺院の住職業が主でありますために、学問研究の方面は、いわゆる趣味的な域を超えないものでございます。大変お恥ずかしい次第ですが、まず最初になぜ私が宋元版の禅籍を扱ってきたのかといいますと、こういう特殊分野の研究を始めた最大の理由は、私、大学院生のころまでは、専攻が唐代の禅宗史でした。その後ちょうど昭和四十年代から五十年代にかけまして、私は駒澤大学の出身でございますが、大学内で行なわれていましたところの二つの禅学上の学術的なプロジェクトといった仕事、つまり、『禅学大辞典』の編集と『曹洞宗全書』三十三巻の編集という両方面にほぼ同時期に関与いたしまして、特に私は主として『曹洞宗全書』のほうの編集に携わりました。宗門の、宗内の典籍に限るわけですが、そういう文献を取り扱う過程におきまして、禅門の典籍全体に非常に強い関心を持っ

たということが大きなきっかけになっているわけでございます。

そこできょうは、「宋元版禅籍と五山版」というタイトルですが、プリント〈資料〉に従ってお話し申し上げたいと思います。

1、宋元版禅籍研究の意義

意義を三つここへ連ねました。

(1)古禅籍の成立と変遷の解明、と書きましたが、中国禅宗史専攻という者の立場から中国の禅籍類を見ますと、二十世紀には、いわゆる敦煌出土文献というものの威力によって、初期禅宗史（唐代の禅宗史）の研究が飛躍的に進歩したことはご承知のとおりでございます。これは中国仏教史全体の研究にも大きく寄与するわけですが、そうした反面、既存の伝統資料というものの文献史的な研究はかえって停滞してしまいました。私は、この方面の基礎的な作業があらゆる方面で立ち遅れているということを痛感したのでございます。宋元版の文献というものが、実は禅宗史研究の大きな基礎的な資料源であります。また後代の禅文献の基礎となっているわけであります。

特に宋版の禅籍というものは、恰もこの時代に禅宗という仏教教団が中国全土を風靡したと言ってもよろしいぐらい大発展を遂げたのですが、その所産として禅籍を非常にたくさん生産しています。その中で重要なものは、どんどん印刷されて流布いたします。

また、時期的にちょうど唐代から五代というほとんど筆写本の時代から、宋代になり版本の時代を迎えますが、そういった時代的な必然性の到来と禅宗の発展は決して無縁ではないと考えられるのでございます。つまり、夥しい版

本の生産と禅宗の発展とは、どうも相関関係にあるようであります。

そこで、この宋元版の禅籍の文献史的な研究というものは、単に書誌学や版本学的な研究のみならず、そこに禅宗史の動向を視野に入れた考察、検討を行なうことによりまして、必然的に古禅籍の成立と変遷の解明につながるのではないかと思う次第であります。それは、(3)禅宗史研究の進展、ということの、また理由でもあることは言うまでもございません。

(2)の大蔵経研究への貢献、というのはどうなのかと申しますと、中国で開版された大蔵経といいますものは、いわゆる近代以前において約二十種類ぐらいあります。このうち宋代、元代、それに遼・金という国の大蔵経まで入れますと、その時代に開版された大蔵経が約半数でございます。これがまたちょうど時代的に禅宗の展開期と軌を一にしております。恰も最初の版本大蔵経である開宝蔵を始めとして、この時代の大蔵経の中に禅籍があり、陸続として入蔵してまいりますが、私は以前その実態を、今申したような同じ方法論によるアプローチを行なってみました。これが先程、文庫長先生からご紹介いただいた小著[1]の主部をなしているわけでございます。

こんな考察は、当該の大蔵経の開版とか、その続入蔵の過程であるとか、あるいは底本問題という細かな大蔵経の研究、あるいは大蔵経同士の様々な関係等の研究にとって、若干の指摘や貢献ができたのではないかと思っております。これが(2)大蔵経研究への貢献と大げさに書いた理由でございます。

2、宋元版禅籍の現存数、は一体どのくらいあるのかということですが、斯道文庫の大御所であられました阿部隆一先生は、かつて中国大陸と台湾と日本に世界の宋元版の典籍の所在はほぼ三分されるとおっしゃっておられました。

ところが禅宗典籍に限ってみますると、やや事情が異なるのでございまして、私が調べた限りでは、宋版・元版で約三百数十点ありますが、そのうち日本に現存するものは約三分の二でして、残る三分の一が中国を始めとして世界各国に散在しているという状況かと思います。

もっともこれは入蔵典籍を含めたからでありまして、宋版大蔵経の現存セットが日本は飛び抜けて多いという理由からそうなっているわけです。そういう数量の中で同じ典籍、同種のもの、あるいは同版のものというのがあります。こういうものを整理してみますと、(1)に示したように約百四十種類、三百六十版くらいが宋元版禅籍の現存数とみられます。そのうち唯一無二の天下一本たる版本は十三種かと思います。それが①として羅列した禅籍でございます。

①廻光和尚唱道（元、北京図）、鏡堂和尚語録（元、天理）、圭峰定慧禅師遙稟清涼国師書（宋、島田蕃根旧蔵）、古梅和尚語録全集（元、北京図）、金剛経纂要鈔科（宋、高山寺）、金剛経註解（元、台北国立図）、四家録（元、南京図）石林和尚語録（元、成簣）、伝燈玉英集（金、北京図）、盤山栖雲大師語録（元、同）、別岸和尚語録（元、同）、北山録注（宋、同）、永明知覚禅師方丈實録（宋、同）

その中の十種類、これは『廻光和尚唱道』『鏡堂和尚語録』『圭峰定慧禅師遙稟清涼国師書』『古梅和尚語録全集』『金剛経纂要鈔科』『金剛経註解』『石林和尚語録』『盤山栖雲大師語録』『別岸和尚語録』そして『永明知覚禅師方丈實録』。この十種はほかに翻刻も、あるいは影印等も全くされていないテキストです。北京図書館のものが一番多いわけです。

その中で、天理図書館の『鏡堂和尚語録』、これと成簣堂文庫にあります『石林和尚語録』、この二点につきましては、私が調べて紹介だけは一応行なっております。[2] いずれも貴重な元版の禅語録でございます。

⑵五山版。これは覆宋元版、とりわけ禅籍の覆宋元版に限定して絞りますと約百三十種であります。

実は、今回の講演会の統一テーマが「書物と日本仏教」でありましたので、あえて五山版を表に出したわけですが、私は実は大変お恥ずかしいことながら五山版そのものの研究にはまことに造詣が薄い者でありまして、ご承知のように川瀬一馬先生の名著『五山版の研究』上・下二冊がございますが、これに大変負うところが多いのであります。宋元版禅籍の覆刻、またはそれに類するものは、大体百三十種、百七十版ほどであるかと思います。その中でわずか一本だけしか存在しないというものが十種ほどです。

②雲谷和尚語録（積翠旧）、黄竜山南禅師書尺（大谷）、介石禅師語録（内閣）、金剛経口訣（京大）、西巖了慧禅師語録（松本旧）、禅門諸祖師偈頌（早大）、澹游集（内閣）、天厨禁臠（両足院）、入衆日用清規（東急）、無門関（大中院）

それが②として掲げたものです。更にその中で現在、活字にも影印もなされていないというのは三種かと思います。『雲谷和尚語録』、それから『澹游集』。後者は内閣文庫のもので、いま私が手にしているのがその写真版ですが、これはほかに影印も活字も何にもないものです。ほかに同じテキストは全く見られないという大変貴重なものです。最後の『入衆日用清規』。これは大東急記念文庫のもので、これがその写真版でございます。これも同じく、ほかでは全然見られないものです。

なお、『五山版の研究』に載っていない中国禅籍としては、早稲田大学図書館の『禅門諸祖師偈頌』。この本文は、もちろんほかでも見られるものですが、五山版はこれ一本だけ。それから、前述した大東急の『入衆日用清規』。それに京都の興聖寺本で知られている有名な『六祖壇経』。それから、立正大学にあります『大慧禅師年譜』という本。

こういうものは『五山版の研究』に載せられていません。もっとも最後の『大慧禅師年譜』は従来は宋版とされていました。ところが川瀬先生は晩年に自ら、これは五山版である、と折り紙を付けられましたので、現在は五山版として扱われております。こういうふうに、宋版か五山版かわからなかったというものが従来ありましたし、現在でもそういう禅籍がまだ若干あるように伺っております。

次に、(3)高麗版の中にも覆宋元版があります。これは私の調べたところで約二十数種、その中で孤本としたものは四種。それを③として挙げておきました。

③慈覚禅師語録（崔南善旧）、宗門摭英集（趙明基旧）、祖堂集、永嘉真覚大師証道歌淨居註（趙明基旧）

このうち、最初の『慈覚禅師語録』という本は、近代における朝鮮半島の文人として知られております崔南善氏の旧蔵本でございます。かつて大屋徳城さんが紹介されておられます。その時点では本があったわけです。この書物は、現存する禅門の清規の中では一番古い『禅苑清規』、これは一一〇三年に長蘆宗賾という雲門宗に属する人がつくった有名な著書がありますが、その作者である宗賾の語録で、『慈覚禅師語録』といいます。ですから、その内容が知られますと、『禅苑清規』が制定された背景などが知られるという重要な語録であると思われるのですが、現在所在は不明でございます。崔南善氏の旧蔵書は六堂文庫といいまして、ソウルの高麗大学に寄贈されております。私は、かつて高麗大学まで参りまして尋ねたのですが、確かに六堂文庫は高麗大学の大学院の図書館に入っております。ところが『慈覚禅師語録』は、その中に含まれていなかったのです。

その後、韓国の友人の方が意欲的に調べてくれたのですが、それによりますと第二次大戦後、韓半島におきますところの六・二五動乱、日本では勝手に朝鮮動乱なんて言っておりますが、あの動乱のときに、該書はどうも流出して

しまったらしい。流出ということは失われてしまったのか、現存しているがどこにあるのかわからない、どちらかのケースなんでしょうが、どこかに所蔵されていて、貴重文献でございますから、いつかは日の目を見る時を鶴首したいと、こう思っております。

そのほか、高麗版の孤本として掲げた『宗門摭英集』以下の三種は、みなすでに影印テキストが公開されております。

3、五山版禅籍の類別、に移ります。五山版の禅籍につきましては、すでに『五山版の研究』によって完全に近い様々な角度からの研究がなされております。これを私どもが依用しつつ、中国でつくられた禅籍という視点から五山版を扱う場合には、次の四種類に分けると便利かと思います。

(1)覆宋元版。宋元版を覆刻したもの。

(2)覆明版。明版を覆刻したもの。明という時代はご承知のように一三六八年から始まります。恰も五山版の全盛期であります。ですから覆明版がたくさんあるのです。宋元版に限らないわけです。

(3)日本初刻版。日本で初めて開版された日本初刻版があることは当然であります。日本人の著作は百パーセントそうです。

(4)は、(1)(2)(3)をまた覆刻したもの、こういうものも五山版の中に含まれています。

それから、ご承知のように、典籍は仏教のほうからは内典と外典という扱いがなされています。誰がいつそういう名前を付け始めたのかは存じませんが、仏教書を内典、それ以外のものを外典と。外典とか外道という名称はあまり

よくないので、私は今日どうかとも思うのですが、歴史的には一応そういう扱いになっております。

ところが、外典とされている書物の中には禅籍も結構含まれているのです。例えば、『寒山詩集』。寒山さんの詩集です。寒山という人は必ずしも禅の人とも言えないでしょうが、私は禅籍に含めております。ちなみに本書は『禅籍目録』にも収録されております。

あるいは、『北磵詩集』などという詩集です。文集とか詩集は大体外典に入っているものが多いのです。ところが北磵居簡のように禅門の人が著した禅的な文章や詩（偈頌）を集めたもの、そういう作品は禅籍の範疇に入れて差し支えないと考えております。禅籍という呼称は誰がいつ始めたのだろうという点も調べたことがありますけれども、江戸時代中期の無著道忠さんなんかも使っていますが、皆、禅籍という対象の範囲はまちまちでありまして、『禅籍目録』なんかの場合は実に広範囲です。経典なんかも禅にちょっと関係あるものはみんな収めている。

こういう状況ですから、禅籍という名称は、使う人によって大いに範囲が違うというわけで、とても定義なんかできないような状況でございます。それは曖昧と言えば曖昧なのですが、我田引水的に申せば、それだけ禅というものは様々な範囲に影響があり、多くの分野、分野で様々な作品を遺している。ですから、そういう文献類も扱わないと禅の研究は総合的にはできない、ということにもなるわけであります。あるいは、広く言えば中国の文化史、日本の文化史を解明するには、やはり広い範囲の意味での禅籍を網羅的に見ていかなければならないということも言えましょうから、私も、あまりきちきちのこれだけというような範囲に絞らないで、禅籍をかなり広範囲に考えております。五山版禅籍の類別についてはそんなふうに考えます。

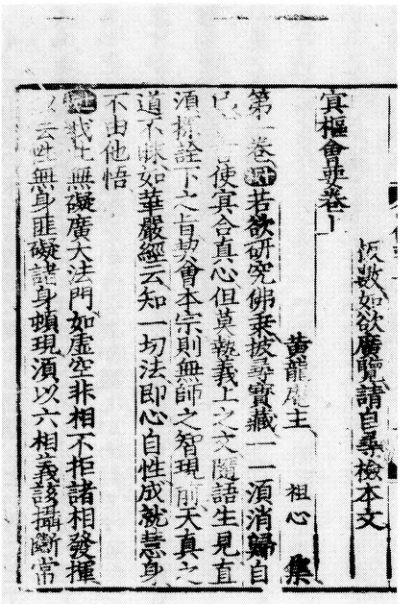
4、五山版の宋元版覆刻に関する問題、ということです。宋元版の覆刻が五山版の特徴である。もちろん中国でつくられた禅籍に限るわけですが、こういう理解が一般にはなされています。確かにほとんどは完全に覆刻している。もっともこれも覆刻という定義が難しいわけですが、一字一句同じ形の「かぶせ彫り」ということですと問題になりますが、あまりそんなストリクトなことでなくて、版式、行格などが一致しているということぐらいですと、確かに覆刻と言えるかと思います。

ところが後述の(2)で挙げたような、一部改刻されているもの。あるいは(3)の日本で全く編集されたものというのが入り込んできております。ですから、中国で撰述された禅籍の五山版というものは、みな宋元版の覆刻である、こういうことは一概に言えないわけでありまして、厳密には違うものもある、また覆明版もあるという理解をまず基本的に持っていないといけないと思います。

ここに挙げたのはほんの一部でありまして、(1)の完全覆刻の例として『冥枢会要』という禅籍を出しました。このテキストは特殊で貴重な覆宋版であると思うからです。この書物は、およそ北宋時代の初めに有名な永明延寿の『宗鏡録』百巻、ほとんどの大蔵経の中に入蔵している著名な典籍でありますが、この『宗鏡録』は百巻という大変浩瀚な書物でありますために、約百年後にこれを臨済宗黄竜派に属する晦堂祖心という人が、そのエッセンスを抜粋して刊行したのが『冥枢会要』でございます。まことに便利な書物として、中国と日本では広く仏教界に愛読されたようでありまして、日本では鎌倉末期に五山版がつくられて以来、何度も印刷され、伝本も比較的たくさん遺されております。

宋版は現在唯一の現存本が台北の国立中央図書館にありまして、その本文の頭の写真と五山版を対照させて載せた

図版1　宋版『冥枢会要』
〔台北〕国立中央図書館蔵



図版2　五山版『冥枢会要』
東洋文庫蔵

のが〈資料〉一の上段の右と左です（図版1・2）。ご覧のとおり第一紙の表側半葉の行数と字数、いわゆる行格は完全に一致しています。本文中に割行形式でみえる「十板」とか「十一板」という文字が白抜きで、いわゆる陰刻になっています。その部分も見比べますと若干形は違いますけれども、五山版は宋版を忠実に承けているということがわかります。これは底本であった『宗鏡録』宋版の本文部分を明示する、五山版編集者の責任ある学問的な態度であります。

また、その第一行を見ますと「板數如欲廣覽請自尋檢本文」、ここをより廣く覽たい者は板數の本文を尋ねみてくれ、という意味が書かれています。「本文」というのは、『宗鏡録』の本文を見てください、こういう意味なんです。

そうしますと、今日といたしましては『宗鏡録』のテキスト研究に役立つのでありまして、『冥枢

会要』の序文は北宋の一〇九六年に書かれたものですが、その中に、『宗鏡録』の底本は浙江と開封とに二つの刊本があって、それによって対校して引いている、こう書いているのです。そういたしますと、『冥枢会要』の底本となった『宗鏡録』は、何と福州版大蔵経に初めて『宗鏡録』が入蔵し、開版される以前に、既に少なくとも二本の北宋版が存在したのだ。そしてそのテキストのおおよその分量が、この白抜き陰刻の丁数から類推可能である。つまり、『宗鏡録』の初期文献史的な解明に益するという点で、『冥枢会要』の存在はまことに貴重であります。

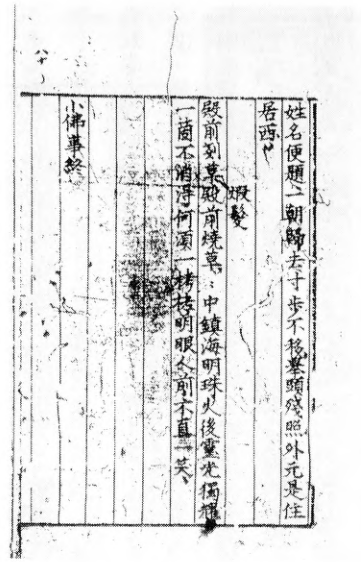
そんなことから私は、本書の東洋文庫の五山版を柳田聖山先生のお手伝いをして発刊いたしました『禅学典籍叢刊』全十三巻の中の第三巻目に影印で収め、初めて『冥枢会要』という書物の五山版全文が公刊され、今日では容易に見られるようになりました。こういう例もあるということです。

(2)一部改刻、という事例でありますが、ほんのわずかな改刻というものは少なくないのです。つまり宋版・元版を五山版でちょっと改めたというケースです。これは実はかなりございます。

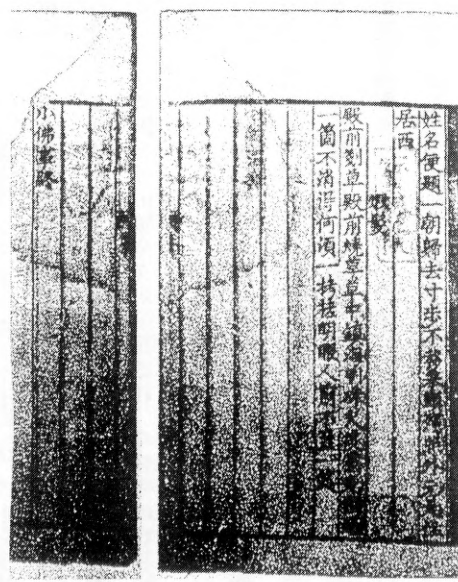
これも〈資料〉一の下の段に、『北磵語録』を出しておきました（四四頁）。右（図版3）が宋版、左（図版4）が五山版です。五山版の写真が見づらいのは私自身が昔、両足院で撮影させていただいた汚い写真版だからです。

写真で「小佛事終」という項目の尾題が書陵部の宋版では丁のおしまいの近くに彫られているのに、五山版では次の丁に彫られている。これだけの違いです。こんなのは違いの内に入らないと言えばそれまでですが、こういった違いは五山版では随所に見られる例として挙げました。

これに対して『円悟心要』という書物の場合。これは写真は出してありませんが、宋版の本文は百三十項目からなる法語の集成です。ところが五山版は、宋版とは版式や行格は完全に同じであるのに、本文には増添が施されている。



図版 3　宋版『北礀語録』　宮内庁書陵部蔵



図版 4　五山版『北礀語録』　建仁寺両足院蔵

合計しますと百四十二項目に増えています。『円悟心要』の宋版は日本に四本現存していますが、私はその中の三本を見ております。五山版は五回の出版が知られ、大変流行したもので十二、三本程が現存しています。私は数本を見ているだけですが、いずれも五山版同士は同じなのです。宋版同士も同じ。そこで宋版と五山版との間に見られるこういった違いは、五山版が既に現存しない別の宋版を底本としていたと考えられなくもない。しかし、現存する宋版は一二三八年刊行の南宋版であり、五山版の刊行は一二四一年と、わずか三年の差しかない。その間に別の宋版が存在したということを想定できましょうか。恐らくできない。なかったのですね。

そうしますと、版式は完全に一致している。三年の差しかないこと、その他にも細かい理由はありますが、やはり五山版は宋版を覆刻でなく増補しているということが考えられるのでございます。

その次に書きました『人天眼目』、これは禅門五家の綱要集です。宋版は全く伝えられておりません。古い版は五山版と高麗版でありますが、その相違たるや実に甚だしく違っています。『大正大蔵経』巻四八に入っているものは明版を承ける江戸版を底本としているのですが、それともまたかなり違う。こういうことになっておりまして、『大正大蔵経』本は五山版との対校をやっていますが、『大正大蔵経』所収の中国禅籍の中で一番校注がたくさんあるのが、この『人天眼目』です。要するに、そのくらい五山版とは違うということです。

なぜだろうかといいますと、五山版は嘉元二年（一三〇三）に日本人の桂堂瓊林という入宋し日本へ帰朝した方の跋文が付いておりますが、それを読みますと、南宋初期の初刻本を七〇年後に物初大観が重修刊行したテキストを、さらに校訂して刊行しているのだと、こういうことがわかります。そうしますと、明らかに五山版は宋版の覆刻ではない。改刻版である。しかも校訂版であるということが知られます。

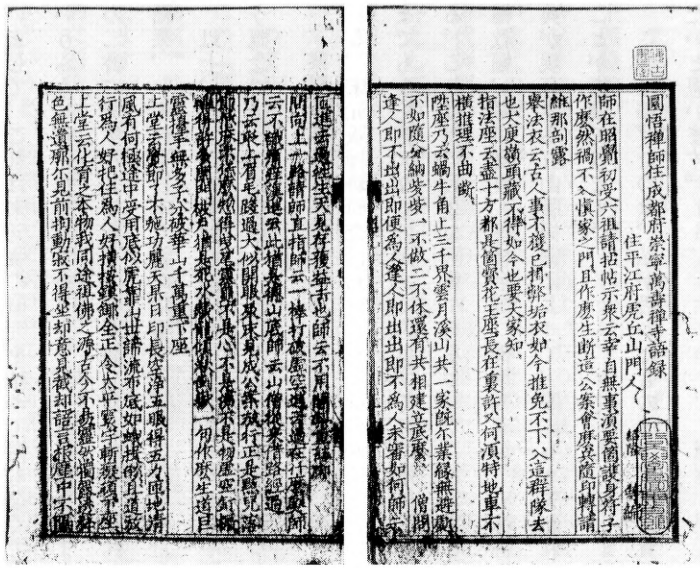
今、高麗版ともうんと違うということを申しましたが、このように五山版・高麗版と明版大蔵経本という三系統がそれぞれ違う。その異本類のテキスト研究をやってみますと、宋版のオリジナルなものからの変遷と、その理由等が解明できる非常に顕著な禅籍の例です。そのためにあえて挙げたわけでございます。

最後に『円悟語録』を出しましたが（四七頁、図版5・6）、これも宋版の伝本は全くありませんで、元版があります。これは故神田喜一郎さんの所蔵本であったものが、現在大谷大学に寄贈されておりますが、この大谷大学本は数ある宋元版禅籍の中で私が見たものの中では白眉の超豪華本でございます。大きさといい、装丁といい、文字の印刷といい、こんな素晴らしい装丁本はほかに見たことがないというぐらいの豪華本です。

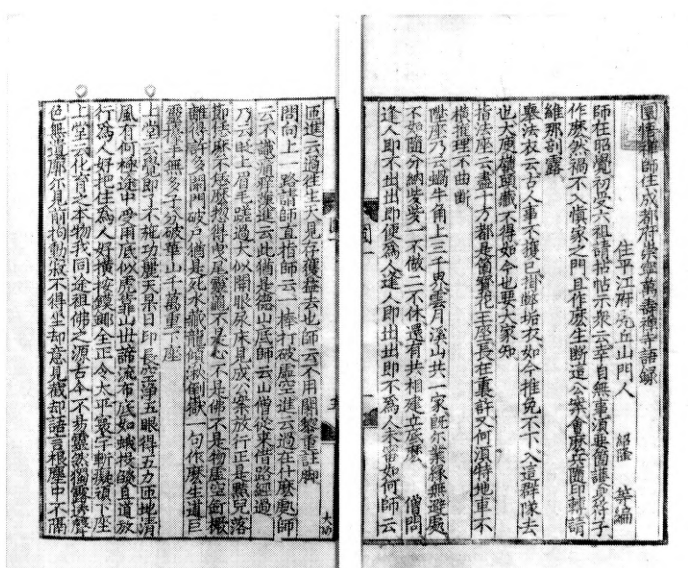
〈資料〉二の上に出したのがその大谷大学本（図版5）。下は『五山版の研究』に載っておりますところの、成簣堂文庫にある、これも唯一の五山版です（図版6）。これらの両本はたまたま同じところを対照して出しました。

この対照した箇所は同じ文面なのですが、ほかの様々な要素からして五山版は、大谷大学本の元版の覆刻ではないことがわかるのです。その論証は複雑にわたりますので、細かい点は割愛させていただきます。大谷大学本の美しい文字、五山版もきれいなのですが、元版の素晴らしさを味わっていただければと思います。

(3)日本編集、というものです。例として『少室六門』と『達磨三論』という二つを出しました。これらは言うまでもなく禅宗初祖の菩提達摩の著述という書名になっております。しかし、史実としましては『少室六門』の中の「二入四行」だけが達摩の真説であって、ほかは達摩さんに仮託された唐代の作品であるというのが定説となっています。『少室六門』の五山版は水戸市の六地蔵寺に、これ一本しか伝本がない。全くの孤版でございます。これがその写真でして、私が昔撮ったものです。



図版 5　元版『円悟語録』　大谷大学蔵（神田喜一郎氏旧蔵）



図版 6　五山版『円悟語録』　成簣堂文庫蔵

私は昔、このテキストとほかの『少室六門』や『達磨三論』の異本類を集めて、それぞれテキスト類の検討を行ないまして、これは宋元版の研究を始めて間もなくであったこともありましたが、「『少室六門』は覆宋版であろう」というふうに書いたわけでありますが[3]、近年になりましてから東洋大学の伊吹敦先生が、『少室六門』と『達磨三論』の二書に関するより多くの異本類を調査され、それらの相違点をコンピューターによる徹底的な分析考察をなされた結果、いずれも日本で新たに編集刊行されたものだと論証されました。こうした例もあるということで挙げました。

以上、わずかの事例を挙げたに過ぎませんが、中国撰述禅籍の五山版というものは、皆、全てを宋元版の覆刻という概念で扱ってはならないということを申したかったのでございます。

5、宋元版禅籍研究における五山版の価値、というテーマを出しました。五山版の価値といえば、改めて私が言うまでもなく絶大なものがあるのはすでにご承知の通りです。私の研究分野としては、まず、(1)佚書の宋元版を補塡する。これは実に大変な価値があるわけでございまして、1の②に挙げた十種のほか、『六祖壇経』以下の書物（夾注輔教編、鐔津文集、禅林宝訓、禅宗四家録、五味禅、禅林僧宝伝、明覚禅師語録など）。合計しますと約七十種の仏典が現存する五山版禅籍によって、既にもう失われて伝本のない宋元版の姿をほぼ目の当たりに見せてくれるということが指摘できます。

ここに挙げたのは、私が扱ったものの中で特に貴重なもの、重要なものを出しました。その二、三をご紹介してみたいと思います。

まず、先の2の②に挙げたものの中に『禅門諸祖師偈頌』という禅籍がございます。これは先程も申し上げました

ように、『五山版の研究』にもなぜか著録されておりません。該書の伝来経路はわからないのでありますが、早稲田大学が明治四十年に購入したものです。現在、同大学の図書館に所蔵されています。

この書物はどういうものかといいますと、禅門では昔から偈頌の作品が非常に多いのでありますが、この書物は八十四種類の唐代から宋代にかけての偈頌集であります。江戸期の町版もありました、それが底本となって続蔵経のテキストになっている。普通は、この続蔵のものを私どもは見ているわけですが、早稲田の五山版にはほかに見られない宋代の跋文が付いております。そのほか様々な視点から検討することによりまして、本書の原型は北宋時代にまず唐代禅門の偈頌が集められて刊行された。それが南宋時代になってから福州の開元寺で――ここは大蔵経を刊行した寺として有名ですが、――大幅にこれを増補しまして増輯版が刊行されております。早稲田の五山版はその南宋版の覆刻であることがわかったのでございます。それから内容的に、この八十四種類の偈頌。この偈頌を一点、一点について典拠を調べてみたところ、面白い事実がわかってまいりました。

つまり、『景徳伝灯録』というもの。これは一〇〇四年に編集された禅門の有名な灯史文献三十巻でございます。この『景徳伝灯録』のおしまいのほうに、唐代から五代にかけての偈頌がかなり集められております。『禅門諸祖師偈頌』に収められている偈頌と、『景徳伝灯録』に収められている偈頌を比較してみますと、面白いことが判明いたします。それは同じ偈頌でもかなり文字が違う。まずルーツが違うからなのです。互いに底本としたものが違う。端的に言えば、『禅門諸祖師偈頌』は『景徳伝灯録』に採られたもの以外の資料を集めようとした。なぜそれがわかるかというと、敦煌出土文献の中にも偈頌がかなりございます。たまたまその中の作品で、『禅門諸祖師偈頌』『景徳伝灯録』の両者に収められている同種の作品とを突き合わせしてみますと、敦煌文献のほうに『禅門諸祖師偈頌』のも

のがより近いのです。これは校訂の違いという以前に、どうも原典の違うものが多かったようです。

テキストの校訂には複雑な問題が内在するわけですが、少なくとも、『景徳伝灯録』は勅修版というか、政府の高官たちの校訂を経て勅入蔵した権威のある仏典です。したがってかなり内容的にてこ入れがされ、整然と整理されている。それに対して『禅門諸祖師偈頌』は民間から刊行された私版です。その違いも考えられましょう。もともと、ルーツになったものはみんな敦煌文献みたいな個性のある筆写本だったはずです。それがこのように、底本の違いと校訂の差異、それらが重層して両書に共通する文献同士の相違が拡大したのではないか、こういうふうに考えられます。そういう意味で『禅門諸祖師偈頌』という典籍のテキストとしての基本的な性格が明らかにされたことは、古文献が北宋期に初めて刊行される際の状況を知る上でも貴重な事例かと存じます。これは早稲田大学にあります五山版のお陰でございます。

次に、これも先の2の②に掲げた二行目の末尾に『入衆日用清規』として挙げておきました。面白い文献です。これは大東急記念文庫に所蔵される天下一本であり、ほかに同じテキストは全くないものです。正式には『無量寿禅師日用清規』という名前になっています。これがその写真版です。この書物は無量宗寿という南宋初めの禅者が著した、禅道場へ入門して毎日の修行生活を送るための基本的な進退作法を定めた指南書、といったような性格の書物でございます。

本書には実は流布本がありまして、続蔵等にも収められております。そのために、大東急の五山版は同じものだろうとして見捨てられてきたのであります。ところが書名は同じでも内容が全く違います。つまり、流布本のほうは、無量宗寿が江西省の田舎のお寺に住職していたときに定めた清規の原文そのままで、非常に短いものです。これがす

ぐれた指南書で軽便ですから、いろいろな他の清規の付録として、たとえば『備用清規』だとか、『勅修百丈清規』だとか、宋代から元代にかけての様々な清規が編刊されますが、『日用清規』はその付録みたいな形で、短いから付け加えられています。それがずうっと流布本の系統をなして伝わってきて、現在続蔵にまで入っている。そういうテキストなのです。

ところが大東急のこの五山版は、それよりもはるかに長く、詳細なものです。無量宗寿は、晩年に江西省の山の中の寺から寧波近くの明州瑞巌寺というかなりの寺に移ってまいります。この寺は道元禅師のお師匠さんであります如浄禅師という方が先に住職した寺です。そこへまいります。浙江省のあの辺は、当時禅のメッカとも言うべき所でありまして、諸方の道場に雲水がたくさんいる。そういう時代背景の下に、もはや短い指南書では間に合わないという時代と地域のニーズに応えて、無量宗寿自身が自作の清規をかなり増補し、詳細懇切に書き改めました。この増補本が宋版として刊行され、かなり流布したと考えられます。元の時代になってから、そこへまたほかの人が増補しております。その元版を覆刻したものが大東急本というわけです。宋版の初刻本も増輯本も、また元版もみな伝本皆無です。ひとり覆元本の五山版、それも唯一本だけが伝存する。そして右のようなことは、この五山版を検討することによってのみ知られる事実でございます。いかに五山版が貴重であるかということを教えられる好例かと思います。

それから、5、五山版の価値としたところに、1の②に挙げた十種のほかに『六祖壇経』以下が書かれてあります。まず有名な『六祖壇経』ですが、ご承知のとおり宋版が何本もつくられているにも関わらず、現存するものはいまだに発見されておりません。日本では鎌倉期の古写本が三本。これは名古屋の真福寺と石川県金沢の大乗寺、それから東北大学図書館に、ともに鎌倉期の古写本三本が現存しております。それと、室町末期頃の五山版一本が堀川の興聖

寺に伝わっている。これだけが知られているわけでございます。

昔、鈴木大拙先生が、この興聖寺本を紹介されたのでありますが、文献史的なことはほとんど言っておられない。大御所の方がお書きになったものを、あとの者はみんな絶対だと思うわけです。それで誰もあと手をつけない。ところが敦煌文献もそうなのですけれども、鈴木先生のおやりになったものは、ご自分で改訂し校訂してしまっている。そういうものがたくさんあります。『六祖壇経』についても文献研究がなされていない。あとの人も全く驚くべきことに文献的なものに言及していないのです。私は一応これを行なってみて、韓国から出されました『六祖壇経の世界』という研究論集の中に書きました。[1] 興聖寺本は基本的なことから検討し直さなくてはいけない、ということを賢しらに指摘いたしました。

次の『夾注輔教編』は、北宋の仏日契嵩という人によります三教一致等を説いた文献でありまして、『輔教編』に対して自ら夾注を加えた禅籍です。五山版は五山の春屋妙葩が刊行したものですが、その底本でありました元版、あるいは、その祖本に当たる宋版の概要が知られる貴重なものであります。

その次の『鐔津文集』についても、また同じです。これも契嵩の文集です。

そのまた次の『禅林宝訓』以下の書も、皆、大陸の古版が失われている現在としては、五山版の存在価値は絶大であります。

最後に挙げておきました『明覚禅師語録』。これは北宋時代に雪竇重顕という禅者が出ましたが、その人の語録です。例の頌古百則をつくって、それが『碧巌録』になった、そのオリジナルな仕事をやった方です。明代以降の各大蔵経には、みんな六巻本の語録が入蔵しています。元版の単行本もございます。ところが五山版は、現存するものは

四本あるんですが、その中で東洋文庫のものだけがほぼ完全に近いのです。しかも元版よりも古い宋版の覆刻版でありまして、宋版の面影を随所にとどめているという事が明らかになりました。

そこで例の『禅学典籍叢刊』の第二巻目に、東洋文庫本の本書を影印版で収録いたしました。この『明覚禅師語録』の五山版は、まだ宋版時代には分巻されていなかった。巻次分けがなされていませんし、書名も個性的です。宋版は非常に個性的な刊行物が初刻本以来多いのですが、本書の五山版はそういう状況をも伝えている好資料でもあります。

同じように宋代に不分巻であったほかの書物の例としては、有名な大分県泉福寺に所蔵されている『宏智録』の宋版。これは近年、国の重要文化財に指定されました。この『宏智録』が、『大正大蔵経』等に入蔵しているものは六巻ですけれども、宋版は分巻されていない。しかも、各冊にはたいへん個性的な名前が付けられています。こういうのが宋版禅籍の一つの特徴でありまして、それを目の当たりに見られるわけでございます。そういう意味でも宋版・元版、あるいは五山版の文献的価値の大きさがおわかりかと思います。

次に、5の(2)宋元版とその覆刻五山版の同一機関所在、と書いておきました。これは宋版と、それを覆刻した五山版が同じ所にあるという、大変珍しいといいますか、ありがたい機関が、私が見たものだけを書いたのですが、両足院の『雲門広録』、大東急文庫の『大光明蔵』、成簣堂文庫の『北磵詩集』、同じく成簣堂の『虚堂和尚語録』。これらは宋版と、その覆刻版の五山版の現物を並べて見比べることができる希有の例です。日本にはこういう素晴らしいコレクターの機関があって、親子関係を一目瞭然と知ることができるという貴重なケースでございます。それ以外は、貴重書同士ですから、ちょっとした写真や図録のコピーか何かを持っていって突き合わせることしかできないのですけれども、現物同士を並べて見られるというのは、私が見た限り、この四つの禅籍は可能でございます。

次に、(3)高麗版との比較（護法論、人天眼目、禅林宝訓、心賦など）。これは五山版と高麗版との比較対照という意味です。例示したのは皆、中国・韓国・日本の三国にわたってたくさんの版本がある書物ばかりです。つまり、三国で大変流行した作品類であります。特に高麗版と五山版の対比によって宋代に初刻された初刻本以来の異版類、そういうもののたくさんある異版類の系統が解明できるものを挙げました。

ここに挙げなかったものの中で面白い例としましては、相州『霊山寺版大蔵経』というものがありまして、霊山寺（りょうせんじ）という、これも神奈川県のどこか場所さえもまだ突き止められていない、この霊山寺で鎌倉時代に一切経を刊行しようとしたのです。少し刊行されました。その『霊山寺版大蔵経』本の中の一点に『伝法正宗記』という禅籍がございます。これは弘安十年に刊行されたもので、金沢文庫に七冊、正式には七帖。粘葉綴じで七帖現存しているだけです。それがそのあとの至徳年間に刊行された五山版『伝法正宗記』の底本であることがわかります。実は、金沢文庫の霊山寺版は刊記を欠いているのですが、至徳版には霊山寺版の題記を目の当たりに留めているので、その親子関係や霊山寺本の刊時などが明瞭になります。それから、この霊山寺版の『伝法正宗記』は、何と中国の福州版の開元寺版大蔵経本を底本としていることが知られるというような、広い意味で『霊山寺版大蔵経』本も五山版の一種だとしますと、五山版たちはそういった様々な禅籍の古い流れを次々に解き明かしてくれる貴重な遺存であり、重要な地位を占めているということが言えます。

6、宋元版と五山版の偽造。そこで古版というものには偽造が付き物のようでございまして、そんな例は古今少なからずあるようです。漢籍一般の場合でもそういう事実が指摘されておりますが、禅籍の中でも、私が指摘したもの

を二つ掲げました。

〈資料〉三に写真を挙げたのがその二点でございます（図版7～10）。上（五六頁）が『佛國禅師文殊指南図讃』、下（五七頁）が『心賦』でございます。

『文殊指南図讃』という禅籍は、例の善財童子が五十三人の善知識を巡るという面白い物語を絵図と文章で示した書物であり、よく知られていることもあって、宋版とされるものが日本には十本以上も伝えられております。

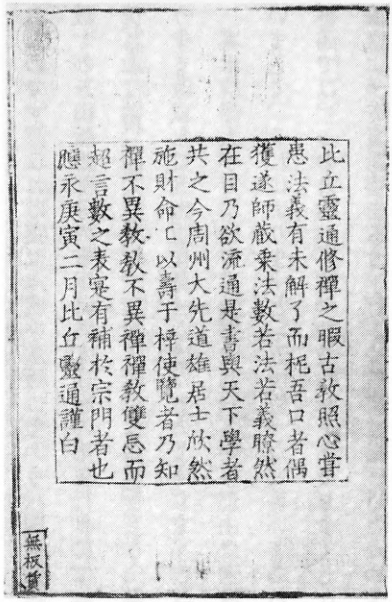
ところが私は、結論から申しますと、大東急記念文庫にあるものだけが南宋期に杭州から刊行された坊刻本。町の本屋から出されたものを坊刻本といいますが、その坊刻本であって、ほかは全てそれを模刻した改版であろうと考えています。

本書は、羅振玉さんという近代の文人が影印本を発刊しております。これは現在大谷大学にある神田喜一郎氏旧蔵の刊行本を影印したものです。該書には刊記がなく、羅振玉も底本は宋版と確信して影印したことを跋記しています。ところが、この大谷本と全く同版のものには、その末尾に京都の心王院の刊行であるという刊記が十一文字、あるものとないものとがあるのです。私は心王院版は宋版を模刻した近世初期頃の刊本であり、その刊記を削除したものが宋版に見せかけた偽造本であろうと、こういうふうに思うのであります。成簣堂文庫には刊記のあるものとないものの同版二本があり、比較が容易であります。大東急にも宋版と無刊記の模刻本とがありますから、両者を見比べられます。

図版をご覧いただきますとよく似ていますが、人物のお顔なんかがちょっと違います。それから、左側の人物が椅子へ坐っていますが、その後ろの衝立の文字が、よく見ますと全然違います。それから、真ん中の下のほうに黒い魚

図版 7　宋版『佛國禪師文殊指南図讃』　大東急記念文庫蔵

図版 8　模宋版『佛國禪師文殊指南図讃』　大谷大学蔵



比丘靈通修禪之暇古教照心嘗
患法義有未解了而耗吾口者偶
獲遂師嚴乘法數若法若義瞭然
在目乃欲流通是書與天下學者
共之今周州大先道雄居士欣然
施財命工以壽于梓使覽者乃知
禪不異教教不異禪禪教雙忘而
超言數之表寔有補於宗門者也
應永庚寅二月比丘靈通謹白

無板賃

図版 9　五山版『蔵乗法数附心賦』
国立国会図書館蔵

比丘靈通修禪之暇古教照心嘗
患法義[illegible]而耗吾口者偶
獲遂師[illegible]若義瞭然
在目乃欲流[illegible]書與天下學者
共之今周州大先道雄居士欣然
施財命工以壽于梓使覽者乃知
禪不異教教不異禪禪教雙忘而
超言數之表寔有補於宗門者也
應永庚寅二月比丘靈通謹白

図版10　覆五山版『蔵乗法数附心賦』
駒澤大学蔵

尾が見えます。その下の「讃曰」の「讃」の字が、両方見くらべますと、まるで違います。そういったように細かいところが違っていて、左側（五六頁、図版8）のほうは模宋版と書きましたが、宋版になぞらえてつくったものであろうと私は思いますが、これが宋版として扱われているというのが現状ではないかと思います。右側（五六頁、図版7）の大東急のものだけが宋版であって、ほかはどうも模宋版であろうと、私はこんなことを六年前に論文で書いたのですが[5]、これに対してどういう反論や批評があるのかまだよく存じません。

下（五七頁）に出したのは、五山版の一種である大内版を偽造しようとした『心賦』の例です（図版9・10）。実は駒澤大学に貴重書として『心賦』が所蔵されていたのです。該書はなるほど五山版らしい文字です。ところが、ここに末尾の刊語だけを写真で対比しました。右側は本物の五山版で国会図書館のもの、左側は駒大本です。よく見くらべると文字が少し違いますし、三行目の所が真っ黒くなっているのは、そこの文字を消さなくてはならなかったからなのです。これは実は「蔵乗法数」という、国会図書館本では明らかに「蔵乗法数」となっていますが、『蔵乗法数』の五山版の部分の末尾にある刊語の第三行目には「蔵乗法数」という文字が書かれていたのです。つまり、この『心賦』は覆元版の五山版『蔵乗法数』に付録されているのですが、その江戸初期に覆刻した版本の『心賦』部分をうまく改竄して五山版に見せかけたものであります。改竄の痕跡は他にも認められますが、それは省略します。

実は駒澤大学で本書を貴重書にしたという理由は、有名な反町茂雄さんの罫紙二枚にわたる識語が書かれて付いていまして、それによりますと「五山版」だと書いてあるんです。それにどうも幻惑されたようでありまして、大学図書館では、この書物の書誌学的な吟味をあまりよくしないままに貴重書としてしまったらしいのです。現在は私の指摘によって貴重書を取り下げ、一般書に格下げとなっております。どうも、あまりいい例でなくて申し訳ございませ

んが、そんな例もあるということで出しました。誰がいつ何のためにやったかということは、私の詮索する範囲外のことでございます。

以上にわたりまして、私が従来行なってきました宋元版禅籍の文献史的な研究の中で、五山版との関わりに関する一端を申し上げてまいりましたが、まだまだなすべきことは山積して際限がないことを痛感しています。幸いこの分野は書誌学、版本学、禅宗史学等の多角的な研究方法論を用いるだけに、研究はまことに面白くて、さきに挙げましたように禅籍個々の系統や変遷が見られたり、あるいはその原因の究明をなす過程で次々に糸のほつれをほぐしていくように、新しい事実が次から次へと解明されてくるのが、こんな方面での醍醐味でございます。したがって面倒な書物、つまり異版、異本が多ければ多いほど面白くてやりがいのある仕事と言えるのでありまして、私の道楽業にはまさにぴったりではないかと思っております。

ただ、そのためには東奔西走の文献閲覧等、やたらに目を使う対校作業というものは最近はやや衰えてまいりましたので、そろそろこの辺で従来のものはまとめて方向転換をしなくてはならないかなと、こう考えております。思いますと、現在はＣＤ－ＲＯＭ等による、電子テキストによる時代でございます。しかし、私はかえってそれだけにこんな手間隙のかかる仕事は希少価値があるのではないだろうか。また、古版禅籍の文献コレクションは日本が世界の宝庫であるからこそ、こういった研究は東洋ないし日本の偉大な書物文化というものをつくり出し、また守ってきた先人への報恩ではないだろうかなどと考えまして、自ら慰めている次第でございます。

本日は大変雑駁でお粗末なお話でしたが、時間でございますので、この辺で終わらせていただきたいと思います。

大変、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

編者注

（1）『宋元版禅籍の研究』（平成五年、大東出版社）

（2）「宋元版禅籍研究（九）――石林和尚語録・鏡堂和尚語録――」（『印度学仏教学研究』第三七巻第一号、昭和六三年一二月）

（3）「『少室六門』と『達磨大師三論』」（『駒澤大學佛教學部論集』第九号、昭和五三年一一月）

（4）「宋代『六祖壇経』刊本考」（『六祖壇経의世界』、一九八九年一二月、民族社）

（5）「『仏国禅師文殊指南図讃』の諸本」（『鎌田茂雄博士古稀記念 華厳学論集』、平成九年、大蔵出版）

――了――